

歩行時と自転車運転時の危険行為に対する若者の意識分析

呉工業高等専門学校 専攻科 学生会員 ○細川 理絵
呉工業高等専門学校 正会員 山岡 俊一

1. はじめに

我が国では、モータリゼーションの進展により自動車が大量に普及しているが、現在でも身近な交通手段として自転車が多く利用されている。自動車との一番の違いは、運転免許証を必要としないことで、免許を持たない世代にとっては重要な交通手段であるといえる。

しかしながら、その一方で自転車による交通事故も多く発生している。全国では、図-1に示すように全体の事故発生件数は減少傾向にあるが、自転車対歩行者の事故発生件数は増加している。これは、自転車運転者・歩行者の事故に対する危険意識が低いことが原因のひとつであると考えられる。特に若者の多くは通学目的で、日頃から自転車を頻繁に利用している。そのため、自転車を運転することに慣れた高校生の交通違反や交通マナーの低下が近年問題となっている。

そこで本研究では、若者の歩行時と自転車運転時の危険行為に対する意識を明らかにすることを目的とする。

2. アンケートの調査概要

アンケート調査の対象は、呉高専環境都市工学科の学生(16歳から20歳)の若者206名を対象に実施した。調査内容は自転車運転中の危険行為に対する意識と歩行中の危険行為に対する意識についてである。質問項目については表-1及び表-2に示すとおりである。

3. 危険行為に対する意識分析

アンケートは、一次調査を実施した後、後日調査結果を提示し、二次調査として再び危険行為について考えて回答してもらった。回答方法は、-5点から5点までの数直線上に両手でハンドルを握り前を向いて運転している人・前を向いて歩行している人を0

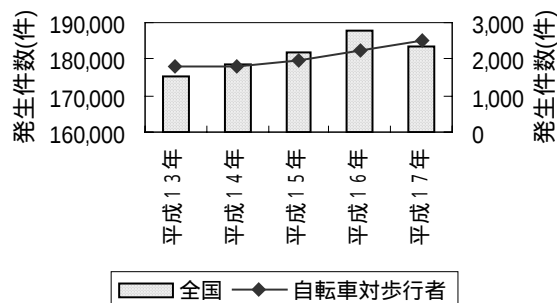


図-1 全国の自転車が関係した交通事故

表-1 自転車運転中の行為についての質問事項

A : 通話をしながらの運転	I : 飲食しながらの運転
B : メールをしながらの運転	J : 傘差し運転
C : 歩道でのスピード運転	K : 無灯火運転
D : 音楽を聴きながらの運転	L : 二人乗り運転
E : 反射材をつけないまま運転	M : 信号無視
F : 喫煙しながらの運転	N : 並進運転
G : 本を読みながらの運転	O : 飲酒運転
H : 一時停止無視	

表-2 歩行中の行為についての質問事項

A : 通話をしながらの歩行	E : 喫煙しながらの歩行
B : メールをしながらの歩行	F : 飲食しながらの歩行
C : 音楽を聴きながらの歩行	G : 並進歩行
D : 本を読みながらの歩行	H : 信号無視

点としたとき、各行為が危険であると思う場合は0点より高く5点以下、危険ではないと思う場合は0点より低く-5点以下で評価してもらった。なお、0点の自転車運転時・歩行時のイメージを写真で提示している。

自転車運転中・歩行中の危険行為に対する回答結果をそれぞれ図-2及び図-3に示す。図中のアルファベットは表-1と表-2の危険行為に対応している。

キーワード 自転車交通、歩行者交通、危険行為、交通安全

連絡先 〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-2-11 呉工業高等専門学校 環境都市工学科 0823-73-8955
E-mail s200656@st.kure-nct.ac.jp

全体として飲酒や視線が外れる運転は危険が高いが、聴覚や夜間に対する危険意識が低いという傾向が見られた。また、一次調査と二次調査を比較すると、全調査項目において危険意識が高くなっていることがわかる。

4. 属性別の危険行為に対する意識分析

3. では、全体としての危険行為に対する意識を明らかにした。しかし、生活環境や自転車の事故経験の有無等により、危険行為に対する意識は、様々であると考えられる。そのため、これらを考慮した分析を行わなければならない。そこで、属性別に危険行為に対する意識に差があるかをF検定及びt検定により分析した。検定後、質問項目と回答者の属性が独立とはいえない、つまり何らかの関連がある属性別の危険意識度を示したものが図-4である。利用頻度については、週に1回以上自転車を利用する人を利用頻度が高いとし、それ以下は利用頻度が低いとした。属性別にみると、事故に遭ったことがある人は、その経験から危険意識が高く、また、事故経験がある人は歩行中の喫煙も危険だと意識していることがわかる。性別では、女性のほうが暗闇に対する危険意識が高いことが確認できた。そして、利用頻度においては、普段からよく自転車を利用する人ほど傘を差すことに慣れているため危険意識が低いと考えられる。

5. 危険行為に対する考えの変化

一次調査の結果を提示した後、危険行為に対する考え方が変わったかを調査したところ約60%の若者が危険行為に対する意識が変わったと回答している。また、危険行為についてどのように思うかという質問では約70%の若者が今までよりも危険行為を行わないようにしたいと思うという結果が得られた。

6. 結論

本研究では、若者の歩行時と自転車走行時の危険行為に対する意識データを分析することにより、交通事故件数データには表れない自転車運転者と歩行者の各危険行為に対する意識を把握することができた。また、一次調査の結果を提示することにより、危険行為に対する学生の意識に変化が見られ、本アンケートを二回実施することにより、危険行為を行わないようにしたいという意識を形成できた。今後の課題として、一般住民に対するアンケート調査に

ついて、本稿同様の検討をおこなっていく必要がある。また、若年層への交通安全教育の具体的な実践と方法について検討する必要がある。

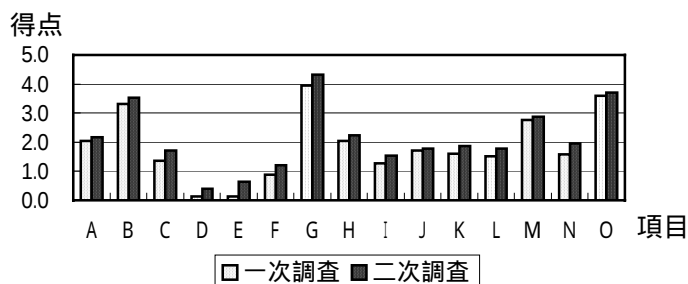


図-2 危険行為に対する意識（自転車運転中）

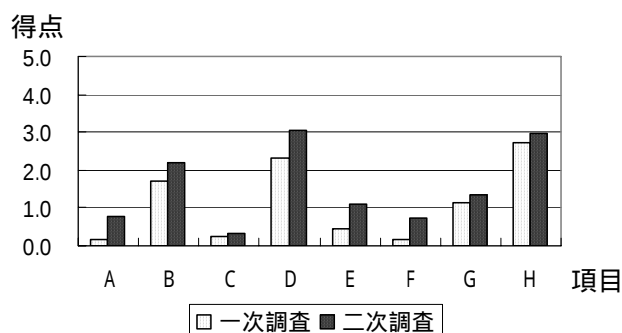


図-3 危険行為に対する意識（歩行中）

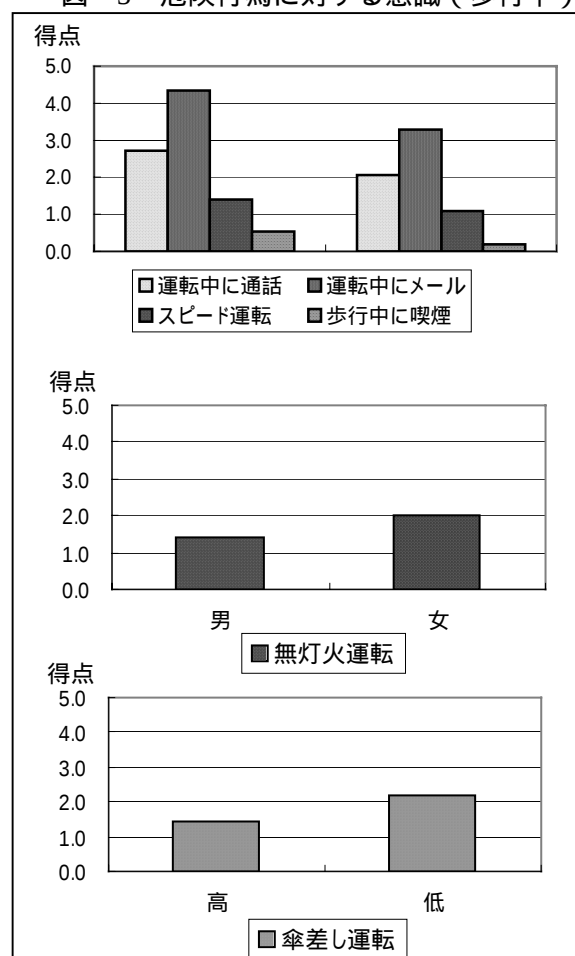


図-4 属性別の危険意識度